

ルを基体とする薄層クロマトグラフィーで処理すると展開液がベンゼン：醋酸エチル：蟻酸=5:3:0.3 の場合に Rf 0.3 と Rf 0.10 の二つのスポットを出すものが少なくない。この Rf 0.10 の方はプロトセトラール酸とは全く異なるもので未だ純粋のものを得られず従って化学式も未定であるが独立の一成分であるとは確かであるので之をコンスチクチン酸 *Constictic acid* と命名した。又この研究に関連して *Usnea trichodeoides* Vain. emend. Mot. と同定されたエキシカータの若干の標本が卓越した地衣学者の同定にも不均含有成分に可成りの動揺がある事を明らかにし地衣体反応だけで同定する事に注意を促した。

本研究に当り多くの貴重な標本を分与又は貸与された Dr. Almborn に謝意を表し、又多数のクロマトグラフィーの実施に当り協力された布万里子嬢に感謝します。

□百瀬静男氏の逝去 千葉大学教授百瀬静男博士 (Prof. Sizuo Momose, 1906—1968) は、去る3月6日病気のためなくなられた。百瀬氏はシダの配偶体の研究で日本における草分け、昭和10年東大理学部植物学科を卒業以来、一貫してこの問題と取り組み、たくさん業績を残された。戦後すぐ文部省大学学術局にはいつからでも、日曜祝日や退庁後の時間に、小石川植物園で研究するという日課が20年も続いた。昭和12年本誌(13: 113)に「羊歯類の Gametophyte に関する研究 (其1) イタチシダの原葉体及びその発達に就いて」を發表、これが(其29)で一応完結(学位論文)、続いて「ウラボシ科羊歯の前葉体の分類学的研究 (1—7)」、「*Lygodium* と *Aneimia* の前葉体」、「シダの葉状前葉体における造精器の位置」、「コウヤワラビ群の前葉体」、「チャセンシダ科の前葉体 (1—9)」、「ミズワラビ属の前葉体」、「リシリシノブ群の前葉体」、「シダの配偶体研究雑記 (1—4)」、「ガラパゴス産数種のシダの前葉体 (1—2)」が出たが、すべて本誌に發表された。試みにこれまでの論文抜刷をとじてみると、本誌1年分よりも厚い。独特のスタイルの図と説明を終始一貫通されたことは、読者諸賢おなじみのところである。このほかにキトログア藤井記念号に1編「フモトシダの類の前葉体と孢子」を發表(昭和12年、中井教授と共著)、日本産シダの全種類の孢子の図を完成した(これは不幸にも戦災で全焼した)。昨年2月には「日本産シダの前葉体」を出版、今まで30年間に見た1,000種類以上のシダについてまとめたもので、627ページの大著である。このあとタイ国産などの材料による研究を進め、なくなれる直前に京大岩槻博士に手渡されたが、この大部な原稿は京大東南アジア研究センターの“Southeast Asian Studies”の最近号に載るように聞いている。まだまだ今後どんな大きな仕事をされるかと期待していたのに、62才の若さでなくなられたことはまことに悲しいことである。(伊 藤 洋)